

## 「保育」の原点

## いくつになっても心・少年

文

## 葛西得男

Text by Tokuo Kawai

イタリアには「ミッレミリア」というクラシックカーのレースがあります。私も何度か観戦に行ったことがありますが、世界でも伝説的なレースです。

ブレシアからローマ、そしてローマからブレシアへの1000マイル(1600km)をかつての伝説的なレース(1927、1957)に参戦した実車とその同型車で走るという公道のラリーなのです。戦前のランチア、フェラーリ、アルファロメオ、フィアット、マセラティ、オスカ、プガッティ、ルノー、アストンマーチン、ベントレー、MG、メルセデス・ベンツ、アウディなどヨーロッパ諸国から錚々たる自動車メーカーが参加する世界で一番美しいクラシックカーレースと言えるでしょう。

イタリアのデザインの車はどれも美しいと思います。やはりミケランジェロの国なのだと思います。エンジンの音もドイツ車や日本車と比べても官能的な音を出すように思えます。イタ

リア人ではできない技術なのではないでしょうか。日本の車のデザインは数字とマーケティングを掛け合わせたみたいな国民の何%が好むのか? そういったデザインなのだと思います。

ドイツの車のデザインは世界No.1の工業国であるためすべて部品の形までパーフェクトだと思えますが、パーフェクトな車というのはあまり面白くないように思います。イタリアの車はアウトであり自由な感じがします。品質よりもデザインが先行されていて、イタリアのデザインは一言で言うところにはいろいろの意味が含まれていてとても深い言葉だと思います。とにかく人を惹きつける魅力の要素を包括しています。

そして、ミッレミリアのテーマが「いくつになっても心・少年」古いものに敬意を」というもので、何歳になっても子供の心を忘れないというイタリアのデザインの真髄を表しているかのようなテーマになっています。

イタリアのデザインの根底にあるものは、純粋で純粋であるがゆえの自由で斬新な発想力だと思います。だからこそ、型にはまらないデザインが次々に生み出され、デザイン王国と言えればイタリアという不動の地位を長年得ているのだと考えます。

以前アップリカの仕事をしていた時のことですが、イタリアにデザインセンターとシヨールーム(ミラノのモン

テナポレオーネ通り)を持っていました。そこでいろいろなデザインが毎日生まれていました。そして、日本のスタッフでは考えられないようなデザインの数々に驚いたものでした。

当時、我々の製品コンセプトはまさに「幸せ」であり、それを具現化する「イタリア」でした。

現在、コロナ禍により世界中の経済も落ち込み、

混沌としています。気持ち

も沈みがちですが、何とか

良い方向へ向かわせたいものです。「気

持ちを和らげ幸せを感じさせる」デザ

インの力。今こそ、それを可

能にできるのはイタリアの

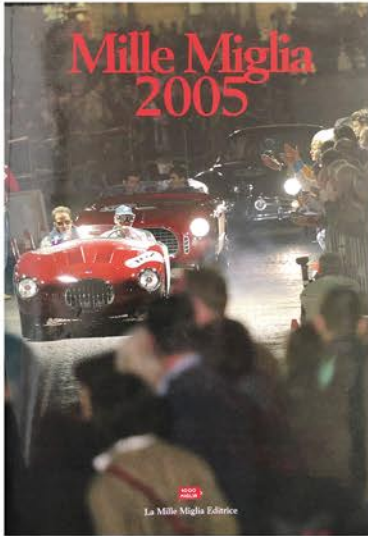
デザインなのではないのか

かと思っ

ています。

## Profile

1950年12月8日大阪に生まれる。  
1972年、追手門学院大学卒業後、米国ボストンカレッジに留学。  
1975年に帰国後、アップリカ葛西に入社。営業部、副社長、社長を経て、1996年に社会福祉法人 松福会 理事長に就任。  
松福会は社会福祉法人として高齢者介護施設「アップリケア」と認可保育園マザーシップ保育園を運営している。  
アップリカ葛西 副社長時代に国連 UNEP 環境計画のスペシャルアドバイザーとして子供たちのために地球環境問題を考えるプロジェクトに参画し、世界の賛同者と世界会議、イベント普及活動などを行いながらその人脈などを広げ現在に至る。



世界一美しいレース「ミッレミリア」

